



山登山歩道」と刻まれた案内碑からコンクリート階段の登山道が続いていた。

ほとんど一直線の階段道でおもしろみは無いが、短時間で山頂に行けそうだ。登山口までの偵察を、朝食前の登頂決行に方針変更した。とにかく朝食が始まるまでに戻ろうと少し急ぐ。途中展望台が有り九份の街を観察する。ここから見た九份の街を見て驚いた。市街地の左3分の1くらいは墓石群が占めている。まるで死者の街で残りの3分の2が現世の人が住む観光地だ。登山口へ行く途中にも綺麗な装飾の墓石が幾つかあった。しかし、山上から眺めて見えた「墓石街」ともいえる景観に呆れる。これは風水に関係あるのだろうか？ ゲゲゲの鬼太郎さんもびっくりだね。

前を行く登山者が一人居た。遠目にも近目にも若い女性で、一人で登っている。私の方が少し速いのでやがて追いついた。「早(おはよう)」と台湾風の挨拶をして、カタコトで訊ねると学生さんとのこと。やがて山頂に着いた。登山口から所要30分だった。

ぐずついた天気割には、マアマアの展望で、基隆の街と思われる方向は複雑な海岸線に乗った家が見えた。山はほとんど草地で樹木は無かった。反対側は雲が低く、遠方は見えなかった。朝食後に行く予定の、「大粗坑古道」の入口のある「九份中学校」を目視で確認できたのは収穫だ。

下山にかかる。下を見れば日曜日のためか、登ってくる人が多くなった。帰路は山腹を巻きながら下る登山道をとった。その道は往路の階段を少し下ったところから分岐する。展望に優れ、よい道なのだが、これが苔むしていやらしく滑る。氷結した登山道を下るときと同じ要領でそっと足を置き、なるべく踏ん張らないで抜け歩く。何とか騙して下りきり、登りにとった階段道に合流するとほっとした。階段は嫌だったのに、滑らないのでありがたい。

宿に戻ると8時15分だった。部屋に戻らず、すぐに朝食を頼む。ハムエッグと薄いトースト1枚で洋風なのだが、お粥や、ご飯、豆のスープなどもあり、主食が足りない人はここから自由に食べる仕組みだった。特に悪くも無くお値段通りの朝食だった。

さて、「大粗坑古道」の準備をして出発だ。連泊なので大きな荷物は部屋に置く。実は台湾で、一人の山



基隆山登山道から見た九份の街。破線囲みは墓地

歩きをしたことがなかった。たいてい案内人がいて、細かい調べも必要が無かった。だが、今度は言葉もママならぬ異国での山歩きなので、ちょっと緊張する。客観的にみれば、やさしい里山歩きで案ずることは無いのだが、道迷いとかが、追いはぎ、登山道が崩壊、未知の毒蛇に遭遇、急な病気など悪く考えるときりが無い。

宿を出ると、飲料をコンビニで買い、昼食用にカステラのようなものを九份の土産屋で買った。これは甘すぎて閉口した。山勘で登山口の「九份中学校」を目指した。少しでも床面積を増やそうして空中にせり出した建物が続き、その崖下の道を、見当をつけて歩いた。けれども傾斜地に展開する街によくあるように、方向を定める道を選ぶのが難しく、見込みがありそうに思って進んだ舗装道路は家並みが切れると、山壁をうねって谷の下に落ちていた。下ってはいけない、上に行かなくては。この道は違う。少し戻って小脇を見ると、猫は居なかったが、手招きをしているように感じる小さな階段の道があった。入口には案内板が有り、予定の道ではないがとにかく遊歩道だ。

私は東に寄りすぎていた。もうちょっと西に戻って「九份中学校」を捜せばよかったのだろう。しかし、この階段を登れば、「九份中学校」に続く道があるかも知れないと思い、その階段を上った。

再び案内板が有って大きく「小粗坑古道」と書いてある。大と小の違いだが、「小粗坑古道」というのが有るとは知らなかった。概念図もあり、現在地と終着地を示している。それによると終着地は「猴硐駅」近く(ホウトン)にでるらしい。

(続く)